

大学生におけるソーシャルネットワーキングサイト（SNS）利用の現状と不適切な利用への考え方

Attitudes for using Social Networking Site of Undergraduate students

勝谷 紀子^{*1}, 東 るみ子^{*2}
Noriko KATSUYA^{*1}, Rumiko AZUMA^{*2}

^{*1} 青山学院大学社会情報学部

^{*1} Department of Social Informatics, Aoyama Gakuin University

^{*2} 日本大学商学部

^{*2} College of Commerce, Nihon University

Email: katsuya@si.aoyama.ac.jp

あらまし：首都圏の大学生を対象にウェブ経由で調査を行い、ソーシャルネットワーキングサイト（SNS）の利用について尋ねた。具体的には、SNS の利用状況、SNS を利用する動機などについてアンケート形式で尋ねた。さらに、最近発生している SNS への不適切な投稿への考え方をテーマに小論文を書くよう求めた。これらのテキストデータについてテキストマイニングで計量的に分析してその内容を検討した。

キーワード：ソーシャルネットワーキングサイト、情報倫理、初年次教育、テキストマイニング

1. はじめに

知り合いや友人との交流を目的としたインターネットのサービスであるソーシャルネットワーキングサービス（SNS）の利用者が増加している。平成 26 年版の「情報通信白書」によると、10 代や 20 代といった若年層では、ソーシャルメディアの平均利用時間が他の年代より高いことが示されている⁽¹⁾。

SNS のサービスや機能は常に進歩しており、それとともに様々な問題も発生している。たとえば、一般に公開すべきでないような不適切な内容を SNS に投稿したりするなどの問題である⁽²⁾。

多くの大学では、新入生向けガイダンスや大学内の情報関係施設のサイトを通して、SNS の利用に関する注意喚起を促している。しかし、依然として SNS の利用に関する問題は発生し続けている。単なる注意喚起をするだけでは、学生に SNS の適切な使用を促すことは難しいのが現状である。そのため、大学の情報倫理教育においても、現状に則した情報モラルを身につけさせる教育実践を行う必要がある。

大学では、初年次教育の段階から情報倫理教育を積極的に取り入れ始めている。具体的な内容としては、著作権法や個人情報保護法、インターネットセキュリティなどの知識の伝達や一般的な事例の紹介が多い。そのため、学生自身の身近な問題として捉えにくい可能性がある。よって、情報の利用や発信に必要な判断力の習得も難しいのではないだろうか。

2. 研究の目的

本研究では、情報リテラシーを身に付けることをねらいとした 1 年生必修科目の受講生を対象に、大学生の SNS の利用状況、SNS の利用についての考え方について調査を行った。また、受講生への課題と

して SNS に関わるテーマで小論文を書くよう求めた。具体的に、以下の 2 点を研究目的とする。

1. 大学初年次の学生における SNS の利用状況の現状、SNS の利用についての考え方を検討する。

2. SNS に関わるテーマの小論文から、SNS の利用における問題について学生がどのように考えているのかを検討する。

3. 方法

研究協力者は、首都圏の大学に通う 1,2 年生 217 名であった。情報リテラシーの獲得をねらいとする 1 年生必修科目の授業時間中に調査を実施した。

調査は、大学に導入されている LMS（Learning Management System）のアンケート機能を利用して実施した。主な質問項目は、出身地、利用しているインターネットのサービスなどの他、自由記述として「LINE でやりとりをする理由」「SNS を利用している理由」「画像や情報の投稿が不適切だと分かっていたのになぜ発信したと思うか」等に回答を求めた。

次に、調査協力者に小論文を書くように求めた。小論文のテーマは、SNS の不適切な利用についてであった。具体的な問題文は次の通りだった。「インターネットのソーシャルネットワークサイト（SNS）にバイト先や店内での悪ふざけをしている様子を写した写真を投稿して問題になるケースが相次いだ。悪ふざけをすること自体も問題だが、その様子を写した写真を SNS に投稿することもさまざまな問題をおこしうる。どのような問題が生じるか、このような投稿行為を防ぐためにはどうすればよいだろうか」。小論文の文字数の制限については、1000 字程度と教示した。

4. 結果

調査の質問項目のうち、1つでも回答した者 217 名を分析対象とした。ここでは、自由記述の内容と小論文の記述内容の分析を中心に報告する。テキストデータの分析には KH Coder⁽³⁾ を用いた。分析の際は頻度が多いが一般的でそれ自体特に意味を持たない語（例：「する」「ある」「いる」「なる」など）を分析からはずした。

4.1 「LINE でやりとりをする理由」

最も多く出現した語は「友達」、ついで「情報」「情報収集」「人」「近況」「友人」などであった。最頻出語「友達」とよく共起しているのは「近況」「分かる」「交流」「共有」などであった。「友達の近況が分かる」等といった記述がみられていた。

4.2 「SNS を利用している理由」

最も多く出現した語は「メール」、ついで「楽」「連絡」「早い」「簡単」などであった。最頻出語「メール」とよく共起しているのは「楽」「相手」「便利」「早い」「気軽」「会話」などであった。「メールより楽だから」といった記述がみられていた。

4.3 「画像や情報の投稿が不適切だと分かっていたのになぜ発信したと思うか」

調査協力者に、SNS に不適切な画像や情報を発信する者について、「発信者は問題になった画像や情報が不適切なものだと分かっていたと思いますか」と尋ねた。「分かっていたと思う」と回答した 116 名にその理由を自由記述で尋ねた。

理由の記述に最も多く出現した語は「思う」、ついで「人」「面白い」「目立つ」「気持ち」「自分」などであった。最頻出語「思う」とよく共起しているのは「面白い」「投稿」「半分」などであった。具体的には、「人に見せたかったから、面白半分で」といった記述がみられていた。

4.4 SNS に関する小論文の内容

分析対象となった176の小論文の文章から、URL、記号、数字、不完全な言葉などを取り除いた上で集計した結果、最も多く出現した語は「投稿」、ついで「問題」「人」「写真」「悪ふざけ」などであった。最頻出語「投稿」とよく共起しているのは「問題」「悪ふざけ」「写真」などであった。最近インターネットやテレビなどで報道された実際の事件の実例やその理由についての記述などがみられた。

さらに、どのような語同士がまとまりをみせているのかを調べるため、小論文によく出現している語(出現回数 100 以上の語)を対象に階層的クラスタ分析を行なった。投稿内容、教育、行為の状況、行為者の属性などのクラスタが見出された(図1)。

5. 考察

大学1,2年生を対象にSNSの利用状況、SNSの利用についての考え方を検討した。LINEをはじめとするSNSを利用する理由としては、友人との交流があげられた。また、不適切な発信をした理由では、面

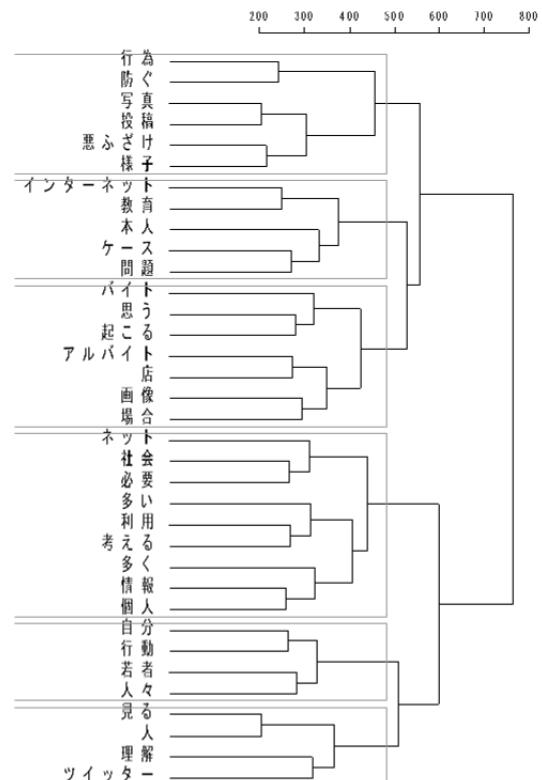


図1 SNSの不適切な利用に関する小論文で使われた語への階層的クラスタ分析の結果

自さや目立ちたい気持ちなどがあげられた。

また、SNS の不適切な利用を題材とした小論文の内容を検討した。小論文には、具体的な事件の実例、不適切な投稿をする行為者の属性、事件が発生した状況などの他、対策として教育の必要性といった指摘が含まれていることが明らかとなった。

今後は、これらの回答の現状をふまえて、初年次教育における情報倫理、情報モラルへの取組を改善し、その効果を検討する必要がある。現在のインターネットの現状に即した情報モラル獲得のための要件を明らかにして、今後の初年次教育における情報倫理教育の実践に活かすことが求められる。

参考文献

- (1) 総務省: “平成 26 年版情報通信白書”
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/pdf/index.html> (2014) (2015 年 6 月 8 日アクセス)
- (2) 情報処理推進機構: “2014 年度情報セキュリティの倫理に対する意識調査報告書”
<http://www.ipa.go.jp/files/000044094.pdf> (2014) (2015 年 6 月 8 日アクセス)
- (3) 樋口耕一: テキスト型データの計量的分析 — 2 つのアプローチの峻別と統合 —, 理論と方法, 第 19 巻, 第 1 号, pp.101-115 (2004)